

## letters

LILY SHU×畑山太志

### 空間 - イメージ

>>畑山さん

本企画に共感を抱いてくれて、参加してくれてありがとうございます。これまでは、畑山さんの作品を拝見したり、自分の展示に来ていただいたり、その度に会話の波長が合う気持ちがありました。改めて向き合って作品について話をしてみると、扱っているテーマのみならず、社会や広く世界に対する批評的な視点のなかにも近い認識があつて、嬉しく思いました。

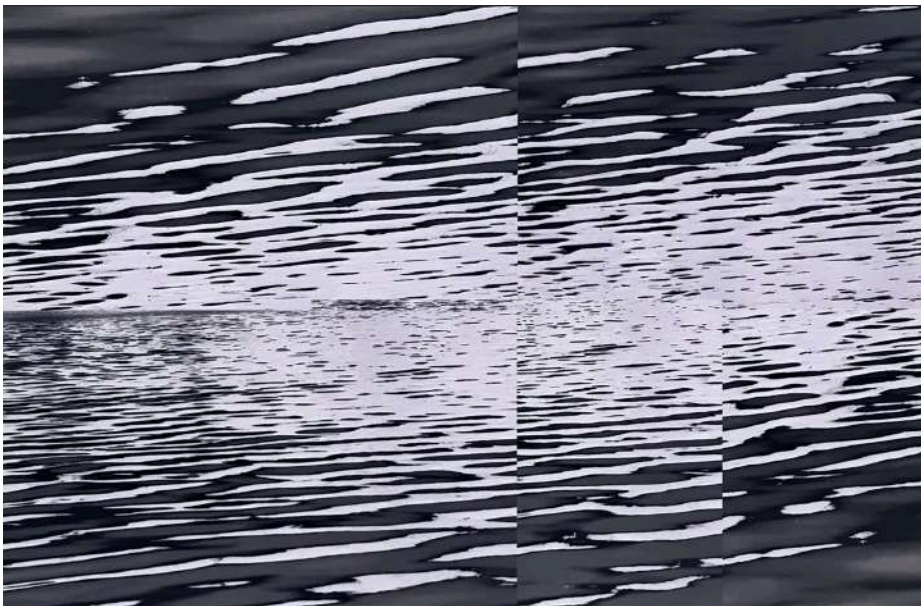
「人新世」と名付けられながら、感染症拡大の危機に脅かされ、気候変動や資源の問題が懸念される時代において、われわれは人間と非人間的なものとの関係性、これから自然と如何に共存できるかの問題に直面しています。言語化され可視化された世界とそうではない世界とのせめぎ合いが、かつてなく私たちの生活のレベルに浮上しています。このような時代背景を意識し、今回の展示に「Naked Image」というタイトルをつけました。デジタルの情報空間が拡張、膨張、増殖するにつれ、偶然性や誤差を含む生身の身体が持つ感性、およびそこから発生する知性が後退し、表象の背後に隠されてしまっているように感じています。調音とフィルターが当たり前になった時代において、純粋な認知はあり得るか。プログラミングや演算が繰り広げられているなか、われわれにとっての新しい「自然」において、記憶と忘却、生死、存在と消滅はどんな意味を持つのか。答えよりも質問を投げかけるつもりでこのタイトルにしました。

電子工学技術によるデジタルのプラットフォーム、メディアによって伝播される情報に直面する時、実は人間がそこで初めて「自然」になるのではないかなと思いました。これまでは、人間は自然から取れるだけとって、アーティフィシヤルな＝人為的なものを作り出し、自分たちを自然に距離を置き、都市を形成させ安全地域を確立させてきたのですが、いよいよ自分達の身体までアーティフィシヤル（例えば整形、人間の代用品としてのAI、ロボット）になっていくにつれ、私たちの身体そのものは「自然」であることを再認識させられます。感染症拡大にもたらされた想像を絶する「死」に直面する時、「身体としての自然」が喚起されるのではないかなと思いました。現代において、「人間—非人間」、「自然—反自然」といった関係性が、対になる概念ではなく、入れ子構造のように行き来し、相対的に互いを定義する概念になってきていると考えます。自分の制作も、そのような逆説的な構造を持つ環境に対する問いかけが出発点でした。

写真の証明性=真実性、そこから発生する社会性に対して関心を持ち、「写真」を素材にして制作発表を始めたのですが、風景写真や建築写真といったジャンルの中に納まり、そのジャンルによって解釈されるものではないので、「何」を撮っているのかという質問自体が成り立たなくなりますね。実は現代社会において、成立しなくなった質問がたくさんあると考えます。アートは新しい質問の形を探る手段でもあると考え、取り組んでいます。



Trail #08 2021 銀塩プリント、フィルム、アクリル、樹脂 480x450mm ©LILY SHU



Interface #02 2021 銀塩クリスタルプリント、アルミマウント、アルミフレーム 1000 x 1517 x mm ©LILY SHU

わたしの写真作品では逆光の写真や、影を強調する写真が多くて、視認性が低く、空気感を重視しています。しかしそれは何かの感情を誘導するための雰囲気ではなく、そこからどんな時間性と空間性を察知できるかということに最も関心を持っています。具象性と証明性に特徴づけられる写真というメディアを使ってみせるのが難しいですが、写真、もしくは複写・複製技術の原理がベースとなる近現代社会における芸術表現を考える時に、写真の存在が避けられないですね。「いいイメージ」という理想、「写真作品」という紋切り型の認識から超えていかなければいけないと思います。実は畑山さんの作品にも写真の存在も感じました。

畑山さんの作品を見て、最初に感じたのは「触手」、「触覚」といった感覚でした。しかもその手触りは既存物質のテクスチャーを再現するのではなく、複雑な環境を生きる際に感じられる「経験の皮膚」をなんとかして絞り出し、流出させている感覚です。等身大＝身体感覚をもって色彩やフォルムを捉えられていながら、デジタルの情報空間の在り方も意識させられ、ブラックホールに吸い込まれていくような、見えない深淵から拡がってくるような世界が現れ、「伸縮」、「行き来」、相互につながって「ネット」となっていくように見えます。一枚の絵の中に、複数の遠近法が存在していることは、とても現代のデジタル写真＝コンピューショナルフォトグラフィ的だと感じました。また、複数のイメージを一つのフレームに収めることは、また現代のメディア環境を示唆しているように感じられます。

色の扱い方も興味深くて、感情を惹き起こす温度を持ちながら、個々の色に自律性を感じました。「素知覚」という概念を知って、それもとても新鮮に思いました。自分の初期作品には「ABSCURA」という造語のタイトルがありますが、「造語」という行為自体がとても大切だと思います。

今回の展示では、会場の真ん中に格子型のインスタレーションを組み立て、パネル作品と樹脂による平面作品を展示していく予定です。全体的に薄暗い雰囲気、来場者がその中に歩き回る動線を構想しています。隣の展示室Cでは、共同作品というほどではないですが畑山さんの作品一点と、自分のテキストをプロジェクターでその隣に投影しているのを組み合わせられたら面白いかなと思っています。お互いの作品の鑑賞／感知できる幅を広げられたらいいかなと思っています。テキストはこれまでZINEとしても制作している、日記から抜粋した言葉の断片になります。中国語が大半になり、日本語と英語がちらほらという感じですが、まとめたらお送りしますね。

引き続きよろしくお願いたします。

(LILY SHU)

>>リリーさん

こちらこそこの度は展覧会の企画にお声がけいただきありがとうございます。以前よりリリーさんの作品に興味がありましたが、その幅広いモチーフとテーマの扱いの核には一体なにかがあるのか気になっていました。少しずつお話を伺っていくなかで、リリーさんもおっしゃる通り、僕の制作の興味や関心と重なる部分が少なからずあるように思います。

「Naked Image」というタイトルはすでに僕が参加することになる前から、リリーさんが用意していた案でしたが、この言葉に共感を感じて、このタイトルのまま進めていきたいということになりました。

企画のお話を頂いた時、ちょうど僕はイメージについて考えていました。（それまではイメージについて深く考えたことはあまりなかったように思います。）僕は「素知覚」という言葉をコンセプトにしている、実際に自然の場などで自分の身体が体験した、目に見えない空気感や存在感に対する言葉にしがたいありのままの知覚のことをそう呼んでいます。言葉にしなければならないものとされてしまう目に見えないものはたくさんあると思っていて、それらが忘れ去られてはならないという危機感が常にありました。しかし新型コロナウイルスの影響もあって、外出や遠出することができず、実際に旅先の場所などで新しい風景を自身の身体をもって体験する機会がほとんどなくなってしまいました。なので、以前に経験したけれど、絵にすることのなかった風景や場所などを振り返って、改めて描くということを最近はしていました。数年前の経験や記憶も、その当時描くものと、今描くものとは、きっとまったく違うアウトプットになると思っていて、今という時から、経験も記憶も読み直される可能性について考えていました。以前に撮ったiPhoneの写真などを見ても、どこの経験なのかどのような体験だったのか忘れていたことも多くあります。しかし、その写真やイメージそのものがもつリアリティに触発されて制作することができるのではないかと興味が出ています。その頃、タルコフスキーの『惑星ソラリス』や『ストーカー』などを見て、映像やイメージそのものがもつリアリティや詩性が気になっているということもありました。

このような制作のリアリティにいた自分にとって「Naked Image」という言葉はとても興味深く響いてきて、自分の制作の可能性を広げるチャンスのようにも感じました。身体を通じたありのままの体験がことごとく奪われ、コロナ禍において「素知覚」的な体験をどう捉えることができるのかという問いが浮上してきていたなかで、イメージそのものに向き合ったときに自身のうちに生じる感覚を掬い取ることが新しい制作への一歩でした。それはまさに僕にとっての「Naked Image」なのかもしれません。

デジタル的な世界が発展するなかで「人間が初めて「自然」になるのではないか」、「身体としての自然」が喚起されるのではないか」というのはとても面白いご指摘ですね。僕が「素知覚」をコンセプトに据えていることは、まさにこの身体の自然をよりラディカルに捉えようとしている方法なのかもしれません。目に見えないものへの志向は、捉え方を変えれば、人間社会ではその存在がほとんどないとされているものです。新型コロナウイルスによって「死」と否応なく直面することになり、社会が周縁に置いていた「死」が圧倒的な存在感を放っています。しかし、その「死」というものが「身体としての自然」を喚起するのだとしたら、「素知覚」もまた「死」に接近する行為であるように思います。人間だけが快適に過ごせる都市空間の創造は、人間以外の存在や情報を一旦ないことにすることによって成立します。人間だけの世界で成り立つ秩序は、その外側にあるものの到来によって破壊される危険がありますが、「素知覚」はその外側にあるものに耳をすませる態度であるがゆえに、「死」を受け入れることなのかもしれません。しかしそれはニヒリズム的な態度ではなく、本来的な「生」の場に回帰するための態度であると思っています。

リリーさんのおっしゃる「人間—非人間」、「自然—反自然」といった関係性が、対になる概念ではなく、入れ子構造のように、行き来し、相対的に互いを定義する概念になってきている」というのは、「生—死」にも言えるのではないだろうかと思いました。自らの身体のうちには、無数の微生物や細菌が住まうと同時に、マイクロプラスチックや放射性物質、化学物質を蓄えていて、地球上で起きている生と死の無限の抗争が私たちの中でも起きていますね。「生—死」は対概念ではなく、相互に入れ子状になっているように思います。

僕も当初、リリーさんの作品に惹かれつつも、その作品群をどう捉えるべきか難しく感じていたのですが、お話を伺っていくなかで、（僕の解釈ですが、）人間社会での定義やコード化された情報の周縁にあるものや脱構築したものに興味があることを知り、ひとつの確固たる言葉に集約することのできないものを、そのままに表象できないかを試みているのではないかと思いました。それはコードとコードの間隙であったり、コードそのものに内面化されてしまっているものの暴露であったりするのかもしれません。それゆえ、リリーさんの作品をジャンルとして捉えようとすることに困難がつきまとうのでしょうか。

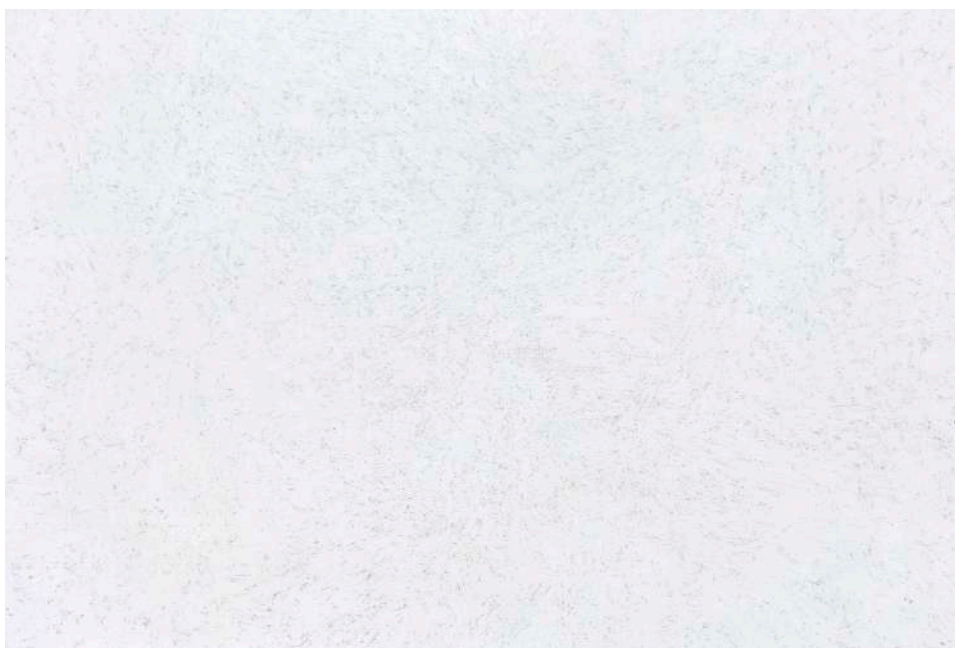
社会が置き去りにしてしまうようなナイーブな感性やプライベートな感情を、そこに含まれる繊細さ（＝雰囲気？）を残しつつも、知覚や認識の問題に、コラージュや映像的シークエンスという技術的方法によって接続させることで作品化しているように見えて、リリーさんのおっしゃる「身体と空間」というのは、社会や文化の間隙からこぼれ落ちてしまうけれども、そこを突破することのできる唯一の希望のことなのではないかと考えてい

ます。そしてその脱構築的な「身体と空間」は「影」のなかで起こるのではないかと思います。

このような表現を具象性や証明性の強い写真というメディアで実現されようとしていることはとても意義のあることだと思います。社会通念化した「いいイメージ」や「写真作品」というコードもまた脱構築の対象になりますね。僕の作品からも写真の存在を感じるというのは興味深いご指摘で気になります。

Abstractとobscuraを組み合わせたという「ABSCURA」という造語もとても面白いですよね。造語することや新しい概念の創出は、既存の価値観や枠組みでは考えることの難しかったものにタッチするための方法のひとつであると思います。現状の限界を突破するためですね。同様に、既存の言葉を丁寧に読み解いて、その意味内容をつぶさに検討することもまたとても大切な行為だと思います。

そして作品のご感想もたいへん嬉しいです。ここまで書いてきた内容で「素知覚」のコンセプトについては示してきたように思いますので、色やフォルムについて少し触れることができればと思います。「感情を惹き起こす温度を持ちながら、個々の色に自律性を感じ」ていただけたのはとても嬉しいご感想です。自らが感じた身体的な体験を基点として、その感覚に見合った色選びをしつつ、周囲に存在する様々な生命・非生命、事物はそれぞれ固有に生きているというリアリティをもって制作しているので、色彩そのものにも自律性が宿るのかもしれない。



素視 2019-2020 アクリル、キャンバス 130.3×194.0cm © Taishi HATAYAMA

フォルムについては、白い絵画においては、画面内にいかにフォルムをなくしていくかという意識があるように思います。基本的に絵画は視覚的な画面の中での構図や色彩をもってフォルムをどう構成するかがひとつの重要な側面といえると思うのですが、白い絵画については、画面内の視覚的=図像的な要素を排したかった気持ちがありました。ビジュアルの強さで訴える方向性とはまったく逆の欲求ですね。しかしそれでも絵画として成立しなければならないので、フォルムなきフォルムを求めていたように思います。つまり画面の中で起こる視覚言語的なフォルムではなく、絵画を成り立たせる方法にフォルムを求めるといことです。現状、実際の風景を黒いドローイングで描画した上から、淡い混色をした様々な白い筆触で画面を満たしていくというプロセス(=フォルム)で白い絵画は制作しています。また、白い絵画以外の作品では、視覚的=図像的なフォルムにも色々トライしていて、今後展開の可能性が無数にあると感じています。



地下世界 2021 アクリル、キャンバス 130.3×97.0cm © Taishi HATAYAMA

リリーさんは今回、写真から広がってインスタレーションを展開されるとのこと興味深く思っています。暗がりのなかでスポットライトを照らして「影」を表出させる試みはどのような体験性を伴うか楽しみです。僕はそのインスタレーションの周囲を取り囲むように、「Naked Image」や「影」に関連する新作と旧作のペインティングを展示しようと思います。人間社会のなかでは見えづらくなっている「影」の部分としての、土や地下、水、光、事物などがモチーフとなっている作品が今回はメインになります。また、始まりと終わりのない円環を描く展示構成は個人的にも興味があります。二重の輪が重なる絵を以前描いたこともあって、絵画のなかと展示空間の行き来も面白いと思います。

展示室Cでの実験的な試みもどのような見え方になるのか楽しみです。リリーさんの語る詩的な言葉と僕の作品がもつ非人間の言葉の重なりが、複数性の言葉として交わるといいなと思います。

引き続きよろしく願いいたします。

(畑山太志)



>>>畑山さん

ご返信ありがとうございます。作品に対する注釈に喜んでいただけて嬉しいです。そして自分の制作意図について、核となる部分に理解を示してくださり、ありがとうございます。隙間や「あいだにあるもの」に対して、いつも強く関心をもっていました。それは自分がマイノリティー的な社会的位置に置かれたことと関係するかもしれません。あまりうまく説明できなかつたり（説明したくなかつたり）するのも、十年間ほど暮らしてきた場所に対して、自分がマイノリティーであることを認めたくない気持ちがあるからかもしれません。海外に暮らし制作発表をしていると、学歴や受賞歴、出自の都市の歴史のほうが理解される切口になりやすく、ひとりの人間として経験し得る世界が置き去りにされやすいと感じています。個人的な経験は、プライベートであり小さなこととして見過ごされやすく、人間は「大きな物語」に目が行きがちですね。しかし、個の存在と各々の関係性は、大きな権力構造に影響されやすく、ちょっとしたニュースや国家間の政治的な喧しいことがあると、身の回りにその出来事に落とされる影が感じられます。おそらく私が持っている「身体・空間・影」に対する認識は、即物的というよりも観念的なのかもしれません。一個人が持つ意識と無意識、その中間にあるやわらかな感性的な世界とともに社会的な空間と照らし合わせて捉えています。

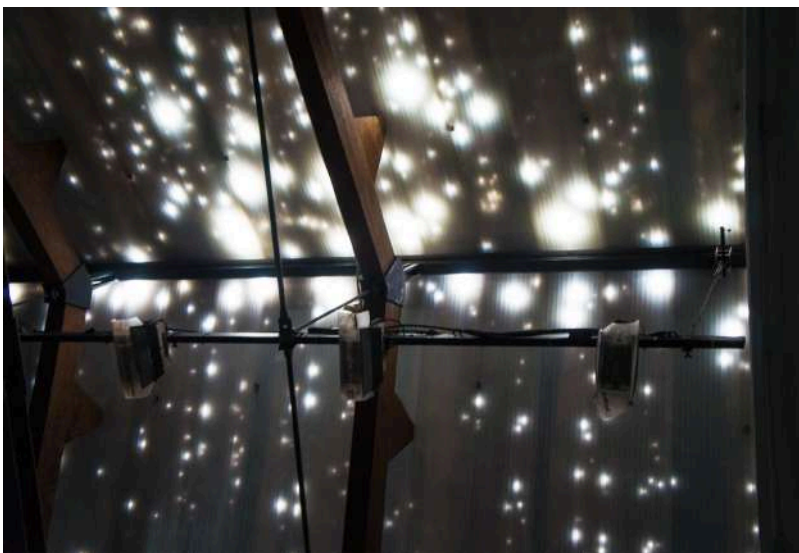
戦後の世界は消費主義であり、物質を資本として扱うことが正当化されました。知的財産やメディア、ヴァーチャルなものに対する所有権が物質化され所有され再分配（消費）されていきます。物質はもともと自然の一部であり、人間主体にとっての「客体—他者」でありましたが、「本来の物質の商品化」と「メディアの物質化」によって、戦後の人間社会は「他者としての物質」の痕跡を消したがつているように見えます。忘却の促進とも言えるでしょう。自分は写真を扱うようになったのは、その一つの存在に込められた「主体の認知を左右する表象の問題」、「メディアとしての社会性」、「映像としての物質性」といった要素を自分の作品を通して引き出し、忘却と没関心を促すメディア環境に抵抗したかったからです。

2016年には東京で一人暮らすアパートで両親を撮影したシリーズ「ABSCURA」を発表し、2019年は植民地の歴史を持つ場所で撮影したシリーズ「OCCUPY」を発表しました。両方とも写真の具象性と抽象性、権力構造のあり方を寓意的に捉える試みでした。それぞれにおいて、個人としての「純粋な観念」と「先入観やメディアに作られた知覚のフレーム」との関係性、主体と他者（自国—他者としての異国）との関係性、を意識していました。「OCCUPY」シリーズの撮影では、植民された側と行った側の両方を取り入れましたが、

そうすると、世界の大体の都市が含まれるということになりました。人間社会以外における植民の範囲といえば、南極北極、アマゾンの森林から惑星に至るかもしれません。抽象絵画が好きでよく見っていますが、そこで感じられる風通しの良さというのは、ミメシス＝模倣的＝人間的な方法論をいったん止め、非人間的な存在＝究極な他者＝主体の不在を取り入れているからかなと考えます。いかがでしょうか。



ABSCURA #09 2016 アーカイブピグメントプリント 395 × 263mm ©LILY SHU



膜/Boarder 2017 ラムダ銀塩プリント 535×750mm ©LILY SHU

気候変動の問題意識と感染症拡大に伴う自粛疲れから、最近は自然資源や植物の話をよく聞くようになり、より注目されるようになりました。畑山さんの制作コンセプトである「素知覚」という概念を聞くと、自然や植物に連想しやすいですが、畑山さんが触れようとしている自然は、人間に役立つ資源としての自然や、人間の心を癒すための自然ではないように思いました。今回新作として描いていただいた作品で扱ったモチーフとして、水だまりや浮遊水面、惑星など、どれも非人間的であるように感じました。社会のなかで正当化され良いとされる自然、エネルギーになる資本としての自然とは対極にあるとすら言えるかな。今回一緒に設営した展示が無機質でややデストピア的なテイストになったのも、そういった認識があるかなと思いました。畑山さんがおっしゃった、「不可視的なものが存在していないかのようだ」という意見も、自分の制作動機とは深いところで繋がっているように思います。



Trail #11 ラムダ銀塩プリント、樹脂 400×850mm ©LILY SHU

自分は最近、写真を素材に、氷・化石・墓石（モニュメント）・壁画を意識させる立体作品を作っています。Trail（トレイル、引きずった跡、痕跡）というシリーズタイトルを付けましたが、意識に対しての、身体に対しての引っ掛かり、前に進むことを止めるかのような歴史からの引っ掛かり、手の痕跡から生まれる立体、視線の痕跡としての写真などを指しています。ここで触れたいいくつかのモチーフについては、「氷」とは一つの物質でありながら異なる様相を持つ存在であり、時間を封じ込み、積層され形成される「化石」、過ぎ去った時間と実存を証明するような「墓石」、公共空間に存在しながら個の声を象徴し、複数の他者に触れられる「壁画」、という風に解釈しています。それぞれ異なる文脈にあるものですが、化学反応と他者の存在がかならず必要とされる写真技法とその社会性と通底する部分があって取り上げています。

畑山さんとは、言語化すれば扱っているテーマも異なり、表現方法も異なりますが、詩学的な次元で対話ができる相手ではあり、あうんの呼吸で展示プランが作れて楽しかったです。パネルの裏面を入口に向ける設営は、この抵抗感がいいって言ってくれたのが嬉しかったです。この度はありがとうございました。

(LILY SHU)

>>>リリーさん

ご返信いただきありがとうございます。展示の設営もお疲れ様でした。

リリーさんご自身の作品についての詳細なご説明をありがとうございます。ご自身がマイノリティーとしての意識を感じていることや、制作において、社会性と「イメージ（主体による認知、感性、先入観）と物質」が行き来する関係性を意識されていることなどを伺うことができ、改めて作品への理解がより深まったように思います。

個人の意識・無意識、感性的世界に対しての社会的空間との関係性に留まらず、その周縁に置かれた物質性への着目は、近年の思想的潮流と接近するようなものがあるとともに、僕自身の関心とも重なり合う部分でもあります。

僕の場合は、社会的なフレームや、思考と認識の枠組みだけにとらわれないように、自らの身体の感性的世界にピントを合わせて、非人間的な世界に照準を合わせようとしていると思います。今回の展示に出品している作品についても、非人間的であることや、人間のための自然ではないとリリーさんが感じ取ってくださって嬉しいです。社会的に良しとされる「生き生きとした自然」とは対極にあるというご指摘はとても興味深いと思いました。僕は「生きている」自然をとらえたいと思っています。人間がこちら側の尺度で、こういったありようが生き生きとしていると決めつけるのではなく、コントロールできない存在として、自律した尊厳ある存在としての自然と向き合いたいです。ここでいう自然はいわゆる植物などに留まらず、事物などの生物学的には生きていないとされているものまでも含めています。また、AIやデジタル的な世界をも含むものとして考えていきたいと



浮遊水面 2019-2021 アクリル、キャンバス 50.0×60.6cm ©Taishi HATAYAMA

も思っています。他人に対しても、自分の思い通りに動かそうとすることはよくないことで、それは人間ではないあらゆる存在にもそうであるはずだと思っています。「非人間的」というと、逆に人間が疎外された暗いイメージを想起するような気もしますが、人間も自然も事物も、同じ地平で平等に生きている存在として、明るいイメージを僕は持っています。



Contact 2019-2021 アクリル、キャンバス 60.6×45.5cm ©Taishi HATAYAMA

抽象絵画についてのお話もとても面白いですね。現代において抽象絵画と具象絵画の境界はあるようでないような曖昧なものになっていますが、リリーさんのおっしゃる「ミメシス＝模倣的＝人間的な方法論をいったん止め、非人間的的存在＝究極な他者＝主体の不在を取り入れている」という絵画制作のリアリティは非常に重要だと思います。絵を描くことは、自分の意図を超えたところで成立するもので、自分という他者との対話・応答によって生まれます。制作における「自分」と「自分という他者」と目の前にある「絵画」の3つの関係の複雑な往来によって作品は生まれてくるので、そのようなブラックボックス化された制作の関係性は「影」に触れている行為のようにも思います。

今回の展示の設営を経てから展示空間を見て、僕が「不可視的なものが存在していないかのように」と言ったのは、二人の作品を通じて「物質性」が強く見えてきて、不可視的なもの

のが物質としてあらわになっているように思えたからでした。「影」＝物質として捉えることもできるなと思いました。

入り口から見えるリリーさんの作品は意図的に背面を向いていて、そのパネルの抵抗感は新鮮で、物質としての「影」を標榜しているのではないかと思いました。また展示空間の中央に屹立するリリーさんの作品群は森のようでもあって、その周囲や中を彷徨い歩くと、壁面に展示された僕の作品が隠れたり垣間見えたりすることでさまざまな関係性を想起させて、自分の作品から新しい情報が見出されるようでした。

もうひとつの展示室Cでは、作品数を絞ってアクアリウムのような詩的かつ心地良い人工的な空間を感じて、個人的に実現してみたかった質感に近づけて嬉しく思います。

対話を通して今回の展覧会が実現できて、僕としても多くの実りを感じています。また今後も制作についてのお話ができれば嬉しいです。

(畑山太志)